埼玉県現代俳句協会報
第83号
2022年9月15日

句会の楽しみ

県南Cブロック長
境　延昭

俳句を詠む者にとって句会は俳句と不可分のものと思う。発表の場であり貴重な研鑽の場でもある。新聞投句や俳句雑誌への投句に専念し、句会は苦手と言う人が居るが私には考えられない。私は句会を楽しむための文芸が俳句と思っている。句会の進行・手順は正岡子規の考案と聞くが結社の違いを超えて今も大差ないように思う。①「投句」小短冊に無記名で一句を書いて所定の句数を投句。②「清記」一枚の清記用紙に数句清記し順送りする。同時に自分のノートに転記。③「選句」回覧された清記用紙から所定の数の句を選び選句用紙に転記。④「披講」担当者が選句用紙を読み上げ選の結果を発表。以上が基本的な手順である。最近、変化が大きいのは②の清記である。古手の先輩からは筆で和綴じの帳面を用いたと聞く。それはともかくコピー機の普及により数名の代表者が纏めて数十句を清記することが多くなった。特にコロナ禍以降その傾向が進んでいる。遅筆の私には有難いことではあるが、筆記して鑑賞する楽しみが無くなり些か残念である。句会では音読は叶わず黙読、筆写の過程で感じることは多い。

問題は句会の規模である。ロの字の席で対面が可能な十名から精々二十名程、発言者の表情が読める程度の距離感が望ましい。主催者や指導者の選と講評はもちろんだが、参加者相互の互選と鑑賞が句会の醍醐味と思う。険悪な空気にならぬ程度の批評・反論こそが貴重である。

時間の制約がありほとんどが兼題による題詠が多い。しかし席題の句会も捨て難い。ちびりそうな緊迫感がたまらない。席題となれば過去の記憶・経験に頼るほかない。題詠であっても季題に限ることはない。文字の詠み込みやテーマなど題の出し方により、句の構想は全方位に限りなく拡がる。

毎度と言う訳にはいかぬが、句会を終え場所を変えての懇親会の楽しみがある。句会の余韻はあってもほぼ普通の飲み会である。全く俳句を離れた会話の中で啓示にも似た知恵を授かることもある。

参加する句会は所属の結社内のものが中心だが結社以外の友人との句会が忘れられない。昔同じ職場で同じ時期に課長職であった四人故「四人会」と名付けていた。私ともう一人はほぼ同じ俳句歴、あとの二人は俳句未経験であった。毎年春と秋の二回、十三年間継続した。日帰り可能な景勝地で昼を挟んで二時間程の句会と歓談。大半は四人が住む東京、神奈川と埼玉の域内であったが時に長野や静岡まで足を延ばした。そんな折、車中の四人掛けの座席で「袋回し」に興じたことがあった。各自一枚の袋を持ち表にお題を書き、各自は順次小短冊に句を書き袋に入れて回す。一廻りする間に一人で四句、併せて十六句の仕上がりである。僅か四人の小間切れの時間を十分に楽しんだ。

楽しむ句会である筈が忌まわしい噂を耳にする。確信の無いあくまで噂の話であるが仲間内での点の取り合いである。マナー違反と云うより句会への冒涜である。そんなことで句会が嫌になった人が居るとしたら余りに勿体ない話だと思う。

第四十四回 埼玉俳句大会

令和四年七月十日（日）
熊谷市立文化センター文化会館

大会では「海原」同人の田中亜美先生をお迎えし、演題「金子兜太俳句の魅力」のお話をいただいた。十二日の埼玉新聞の一面コラム欄は、当大会に触れ、『兜太先生が亡くなって四年余り。この間、コロナ禍やロシアの軍事侵攻、安倍晋三元首相が凶弾に倒れるなど、言葉を失う出来事が続いた。「今こそ金子兜太の俳句を考えないと（兜太先生に）怒られると思った」という田中先生の言葉に胸を突かれた』との文章を載せた。

大会での事前投句は、一八五名の六六八句であったが、当日参加者は、六十名、当日投句は五十句であった。三年ぶりの大会、コロナ禍、参院選投票日、「暑いぞ！　熊谷」での開催……、いろいろ考えさせられるが、俳句を通じ、魅力ある方々との出会いがあり、俳句創作への力となった大会であったと考える。（神田一美　記）

入選作品―事前投句

◆第一位　埼玉県知事賞
鉛筆もわたしも眠い蝶の昼　豊田　いと

◆第二位　埼玉県教育委員会教育長賞
菜の花や首振って脱ぐヘルメット　北上　正枝

◆第三位　埼玉県芸術文化祭実行委員会会長賞
戦するな部屋いっぱいの吊るし雛　神田　一美

◆第四位　埼玉県芸術文化祭実行委員会奨励賞
何でもない日ですけれども桜湯を　浅野　都

◆第五位　埼玉県芸術文化祭実行委員会奨励賞
水平線まナドレの高さ風ニー　[illegible]

◆第六位　埼玉県芸術文化祭実行委員会奨励賞
陽炎に躓きさうなハイヒール　石井　喜恵

◆第七位　埼玉県文化団体連合会会長賞
蝶の羽化みなひたむきの途中なり　茂里　美絵

◆第八位　埼玉県現代俳句協会会長賞
草萌ゆるどこかで絶えず戦して　中村　香苗

◆第九位
もう一歩前を見たくて青き踏む　岡村　行雄

◆第十位
枯蔓を引けば青空こなごなに　星野　和葉

◆第十一位
ひらがなが浮遊している春の空　田中　朋子

◆第十二位
ハモニカが欲しかった日の根深汁　折原野歩留

◆第十三位
蠟梅や名もなき星の響き合う　篠田　悦子

◆第十四位
雪女郎泪の武器は見せぬまま　小山　敏男

◆第十五位
のらり生きくらり躓く大枯野　持家　悦夫

◆第十六位
青空の扉を開けて鳥帰る　江口　武夫

◆第十七位
方言の会話に字幕うららけし　久下　晴美

◆第十八位

二〇二二年度　会費納入のお願い

◆第十九位
銅像の馬にたてがみ春の星　西山貴美子

◆第二十位
春人参となりのみみずももいろに　田中美佐子

入選作品―当日投句

◆第一位　熊谷市長賞
水打って時代遅れの路地が好き　折原野歩留

◆第二位　埼玉県俳句連盟会長賞
決着は線香花火の落ち具合　浅野　都

◆第三位　埼玉県現代俳句協会会長賞
崩れゆく戦後といふ語心太　高橋　邦夫

◆第四位
行き詰まる金魚はいないガラス鉢　宮澤　順子

◆第五位
さるすべり武人埴輪のまろき肩　大塚　茂子

◆第六位
薄紙にくるむさよなら沙羅の花　室田　洋子

◆第七位
語られぬ戦のありてパナマ帽　萩原　陽里

◆第八位
胸張って地産地消の青田風　渡辺　智恵

◆第九位
苔の花一人とひとりすれちがふ　中村　香苗

◆第十位
青田波わたしはどこにいればいいの　山﨑　十生

感銘句の鑑賞

（会報第八十二号より）

県南Aブロック　杉本　青三郎

引っ込みのつかなくなった潮招　浅野　都

なんともユーモラスな作品である。言い出したら、そうなるケースがあり、言わなくて良いことまで、ついつい喋ってしまい、後で反省することになるのである。潮招がそういうことになっているとは面白い。

ない方の腎臓を揉む春隣　山﨑　十生

恐ろしいほどに、リアリティのある作品である。左手がないのに左手が痒くなったりするように、手術してなくなった方の腎臓が未だに、揉んでくれと言ってきているのである。春隣までも気を揉んでいるようだ。

妻眠る今夜は雪になるだろう　安田　久太朗

疲れ果てて隣で眠っている妻の、本当にかすかな寝息が聞こえるようである。それは、雪になる夜の静寂が全てを包み込むような、やさしい夜であろう。

県南Bブロック　青木　鶴城

朝霧に煙る山々彩雲光る　頼　奈保子

素晴らしい景の句。山々は頭だけを出して朝霧に覆われとても静か。空に浮く雲が朝陽に照らされ五色に輝き出した。下五を「彩雲光る」と七音にした効果は十分である。今日が素晴らしい一日の予感。

眠るなら北の海底春の雪　飯島　史郎

鑑賞の難しい句である。作者は普段眠りが浅いのであろうか。すぐに解け出してしまう春の雪に浅い眠りを連想した。北の海底の深く静かなところで安心して深い眠りを味わってみたい・・・。もっと深い意味が有るのかもしれないが、心惹かれる句である。

女正月中途半端な酔い心地　綿貫ひさの

忙しく正月を迎えた女性たちが、小正月にやっと正月気分に浸れる。女性同士で思い切り酒宴を楽しもうと思ったのに、何だこの中途半端な酔い心地は・・・。ユーモラスでとても楽しい句である。

県南Cブロック　堀口　流三

いまひとつ度胸の足りぬ恋の猫　増田　信雄

猫は顔が大きいほど強いという、この猫は小ぶりのかわいい猫と想像できる。飼う側としてはかわいい猫が良い、そう

いえば我が家の猫はいつも喧嘩に負けて傷だらけだ。

冬帽子どれが私の夫やら　森川利根子

自分の亭主が判らぬか？　俳句に笑いは必要ない、川柳ではないのだ。だが、私は笑いが大好き、むしろ笑いを句に求める。この句のとぼけたところが大好き。

軽トラと二人暮らしの梅の昼　秋永　悦子

ご主人を亡くされたのでしょうか。ご主人とのお出かけが、今は軽トラがお供となってしまった。しかし、一人強く生き抜く作者の気持ちが伝わってくる。

入間・比企ブロック　長澤　建次

屈み込み風船渡すちんどん屋　森山洋之助

子供はちんどん屋を見ると、母親の手を振り切って付いて行く。母親は子供の後を追いかける。ちんどん屋は立ち止まり、子供の目線に合わせ風船をあげる。ちょっとした街中の一風景。ちんどん屋の目がやさしい。

下萌や言葉見つかるまでさがす　矢島　清

句作りで、納得のゆく言葉が出てこないことはままある。そして探し続ける。しかし、ひょんなことから願ってもないフレーズが浮かぶ。それは時が来れば、新しい芽が顔を出す下萌のように。

ふくろうや酒徳利に紙の栓　横山かつ代

酒徳利とは、やや時代がかる。しかし、嘗てはどこでも見られたもの。冬の夜、家族が寝静まった後の独酌。今日も一日無事であったと、ほっとする男。外ではふくろうの鋭い鳴き声。「紙の栓」に男の哀愁を感じる。

熊谷ブロック　長谷川順子

忘却とはカルピスソーダの白濁　宮城留美子

洒脱な句。カルピスソーダが白く濁っているとは当り前のことであるがその濁りの中に想念を忘れたいという事なのか？白濁が良い。

ない方の腎臓を揉む春隣　山﨑　十生

この方は腎臓の摘出をされた方と思います。同じ様な現象に幻肢痛というのがあります。痛みはないのだけど気になってさわってしまうのでしょう。でも春はすぐそこ、元気を出しましょう。

春立つや晩節ゆったりと思考　吉澤　祥匡

同感でいただきました。余生はゆったりと生きたいものです。思考・・・意味が深いです。作者の日常が浮かんできます。

秩父ブロック　金子　和美

ヒヤシンス主治医も少し病んでゐる　松居　一江

自分が病んでいるから通院しているのだ。でも、医師も少し病んでいることがほのとおかしい。勝手な想像では医師が病んでいるのは心である。少し弱いところのあるお医者様の方が安心できる気もする。

忘却とはカルピスソーダの白濁　宮城留美子

大抵の人はだんだん過去を忘れていく。そのもやもやをカルピスソーダと言ったところが掲句の面白さだ。俳句は楽しいなと思う。ペットボトルの白を見ながら切なさもおかしみに変えていく。

戦後永し誰も拾はぬ追儺豆　若林波留美

ハッとした。今は節分の豆撒きをしない家庭も多い。私も小さな声で形ばかりの豆を蒔きそそくさと片付けている。飽食の今を考える。大切なことはなんだろう。

北埼ブロック　髙井　元一

薄氷の向こうの母へ渡れない　堀之内長一

肉親への感情を巧みに表現されている。母御は他界されているのかも知れない。薄氷の措辞により冷静に感覚されていることに共感。

トーストに光る蜂蜜春日和　村本なずな

トーストに蜂蜜それだけで嬉しくなってしまう。長閑かな日中の一場面。春本番を思いきり詠っている。付きすぎ感あるも敢えて推し度い。

春の虹すこし離れてキリンの顔　茂里　美絵

伸び伸びした動物園風景で楽しい。少し離れてで却って至近感も、キリンの顔の動きまで想像され、何か物語も生まれそうである。

埼葛ブロック　高橋　邦夫

命あるもののごとくに雪降りをり　松本　誠司

たまに降る雪に我を忘れて見入ってしまうことがある。風に舞い、石や木の葉に積もりつつ、或いは溶けつつ降り続く雪の姿は、命そのものに思えてくると作者は詠む。各地の雪の伝説にも日本的なアニミズムを思う。

真白な富士の見おろす湖凍る　柳澤　二重

富士五湖のどこかであろうか。厳冬の富士と湖の姿である。普通は湖から富士を見上げることになろうが、人を寄せ付けない厳冬の富士からの視線として詠んだことにより、雪富士と凍湖がくっきりと浮かんでくる。

雛納め微熱は耳朶に集まりぬ　渡邊　樹音

手早くいそいそと見える雛納めは、来年の恙無い再会のために雛を丁寧に元の箱に帰してやる中々の大仕事である。心情は読みきれないが、一心に雛を納めた快い疲れと一抹の淋しさが「微熱は耳朶」の措辞に窺える。

諸家近詠

（五十音順）

天牛や灯の色暗き奥の院　さいたま市　石井　喜恵

滝落ちて白き沸点たぎりけり

不屈な眼上げて足噛む夏の馬　さいたま市　石田せ江子

アルプスの氷河軋みては崩れ

一本の道となりたる蟻の道　春日部市　石原　道明

千羽鶴千羽の祈り広島忌

天上に母がゐるかも茄子の馬　さいたま市　石山かつ子

秋暑し硝子の皿に薄荷糖

指人形の右手の指で揺らす藤　さいたま市　伊東　裕起

夏の果て自分の目蓋を見失う

湧き水で打つ二八蕎麦山は雪　秩父市　稲葉明日香

清明や巨樹の尾久杉神となる

山一つ置いて闇より大花火　深谷市　井上　燈女

向日葵や過不足なしの厨妻

数珠玉は遥かな眺めかもしれぬ　朝霞市　岩淵喜代子

さきざきのことは花野の地つづきで

クーラーや顔認証の拒まるる　所沢市　内野　義悠

打水のあと心音の濃かりけり

関節痛ラジオ体操効いた夏　春日部市　遠藤　久美

蝉しぐれ不器用だけど吾なりに

底紅の紅をぬすみし薬指　さいたま市　梅澤　輝翠

下校児の胸に抱かれし朝顔の鉢

風のいろ海のいろなる氷菓かな　春日部市　浦川　聡子

ほうたるのつめたきひかりてのひらに

望の月癒す力の混じりたる　越谷市　内田　幸彦

敬老の日やダイヤの乱れを膝栗毛

三郷市　宇田川良子

定位置はカウンター端水中花
抽斗に未完と保留花蜜柑

志木市　植　朋子

はつなつは汝の耳朶の手触りよ
はんざきの四肢頼りなく唯物論

川口市　大石　壽美

密避けて奥へ奥へと沙羅の花
歩けども歩けども着かぬ七月尽

狭山市　大川原弘樹

盛り土にのぞく嘴青葉寒
赤子泣き噴水広場翳りゆく

鴻巣市　大塚　茂子

秩父つ子はしやぎて灯す彼岸花
ポンポンダリヤ生後十日の掌

さいたま市　大西恵美子

胡麻ひねる如くに蟻を潰しけり
銃声も母にひびかず夏の霧

さいたま市　大場　順子

夏痩せて蜾蠃少女の腰となり
滴りて滴りて石仏顔

川口市　大平　寿江

山裾は白のスカーフ蕎麦の花
逢はずとも眼裏に君けふ無月

さいたま市　岡嶋　澄子

炎天や白旗挙げる石頭
秋が好き生まれた季節といふだけで

さいたま市　岡田　宣子

楽流れあがる噴水リズミカル
熱帯夜子等の寝返りはなはだし

上尾市　岡田　弘子

西瓜食ひ心の荷物下ろしけり
天界にいのちの火花夏の果

さいたま市　岡村　行雄

夜行バス降りては絡む青田風
青田風軽自動車がよく似合う

さいたま市　岡村伊志子

早や梅雨明けむらさき葵立ちつくす
白樺をかばつてカナブン虐めてる

羽生市　小川　紫翠

踏切を越えて踏切日雷
底紅や平常心が保てない

川越市　荻谷　修

夏雲や上司飛び越す報連相
朝散歩浜に身投げのホタルイカ

所沢市　尾澤　員江

白桃に僅かな浮力昼の月
生前の梅干してゐる真昼かな

東松山市　小高　政子

セルを着て母さみしそふ夢の中
堂々と草の生へたる草を取り

春日部市　尾堤　輝義

使い捨てマスクと懐炉兵隊も
雹が降る石合戦の音たてて

春日部市　音無　早矢

嘘っぽい顔しやがって牡丹雪
夏の夜土星の環は武器になりうる

加須市　折原野歩留

人はみな銀河と渡る切符持つ
端居して罪のごとくを覚へけり

草加市　片岡　宏文

お互いに耐えし金婚稲架光る
葉の色に秋兆しをり書斎窓

川口市　片山　蓼

ぎゅううと絞りし檸檬喪主となり
夾竹桃針いっぽんを拾いけり

加須市　加藤いさむ

盆の鐘二つは父と母へ打つ
物忘れはじまっている茗荷の子

三郷市　加藤　圭子

突きささる暑さや経の反響す
そんな事どうでも良いと草矢吹く

和光市　加藤ミチル

おもい願い祈ることしかできない夏
焦燥に耐えきれなくてかき氷

皆野町　金子　和美

忘れては忘れては入道雲
青芒かき分け少年の負けん気

越谷市　金子まさ江

刃物研ぐ八月の水尖らせて
錆びついた脳細胞に夏の潮

ふじみ野市　鏑川　太郎

涼しさや器に触れる匙の音
減り続く余生に夢は増える秋

さいたま市　神谷　邦男

緑蔭や小流れ見えぬ札所道
腹這ひの老いたる犬よ扇風機

吉川市　河口　俊江

山の色とらえし滝の一途かな
遠郭公地球の裏の眠る刻

鴻巣市　神田　一美

日の出から茄子と胡瓜が待っていた
夏草や格闘できるうちは立つ

秩父市　喜田礼以子

百日紅いよよ色増し子らの反
コロナとて秩父の山は緑濃し

新座市　北上　正枝

晩年の身勝手ゆるそう心太
アンタレス心の痛みに蓋をする

さいたま市　北原　恵子

時計草はやはや伸びて五軒まで
葉桜や毎年のごとうつ気分

上尾市　木下　周子

筒鳥の巣を飛び出してそれっきり
「洒落臭せえ丸くなれねえ」甘藷焼酒

入間市　久下　晴美

若さとは汗のしたたる喉仏
かなかなや来た道はもう戻らない

さいたま市　久保田孝子

良き話聞きしばかりの桃届く
注文のスーツの届くこの猛暑

さいたま市　熊倉千重子

少年に決意促す雷一打
初採りの茗荷揚げたり刻んだり

さいたま市　黒木　幸子

意を決しての午後の外出黒日傘
時々は思案の日蔭寺目指す

入間市　桑原　三郎

ほうたるの灯の点滅は音楽
空蟬を歩かせてゐる机かな

上尾市　小池　弥生

本棚は地層のごとし五月闇
報われぬ努力もありし芋の花

川口市　小泉　信

夾竹桃赤き記憶の敗戦日
敗戦の蜩の声身にしみる

さいたま市　小駒さち子

器に活くる菜の花の茎ぐんぐんと
額の花亡母に似たる叔母の声

松伏町　越川ミトミ

古利根の茅花流しに水の神
流氷や鍵の容をして眠る

熊谷市　越田　栄子

感性の触れ合ひし時星流る
涼風や山羊の草食むワイナリー

さいたま市　後藤　章

月に人このごろ行かず蟇
新宿にゴジラゐるビル明易し

戸田市　後藤よしみ

向日葵を見つめ残像揺らすなり
静かなる日の剥落に夏落葉

入間市　小林　邦子

いつまで揺れていればいいのか金魚
冷蔵庫の悔やし泣き宥められずに

ふじみ野市　小林多恵子

頑で宙ぶらりんで青葡萄
掌を胸のたかさに水蜜桃

さいたま市　小林　好子

踏ん張りて口いっぱいの山清水
木下闇身をかたくして幼の手

さいたま市　五明　昇

軍艦島に昭和の余韻卯波立つ
地果てて西日に燃ゆるロカ岬

行田市　近藤　徹平

渋滞や窓に開始の揚花火
「百穴」の異界めく闇苔茂る

川越市　近藤真由美

この国のいびつな形原爆忌
幸福をウクライナへも流星群

狭山市　斉藤　京子

終戦忌白紙の上のボールペン
夜もあをき山の空なり盂蘭盆会

秩父市　斎藤　久子

百日紅人待つことは生きること
歳といふ重さふりきる青嵐

川口市　早乙女文子

埋火に似て消しきれぬ蛍の火
生国は天空にあり思い草

さいたま市　境　延昭

剥き出しの梁に電球夜の秋
秋の風息吹きかけて眼鏡拭く

春日部市　坂川　花蓮

階や春泥つきしハイヒール
ふぞろひの色鉛筆やねぎの花

ふじみ野市　相良茉沙代

薄衣重ねて羽織る夕まぐれ
体温と同じ気温の夏の果て

鶴ヶ島市　佐野つる女

極暑ああ針の筵にゐるごとし
手仕事に風やわらかき扇風機

さいたま市　澤浦　和美

ほんたうは遁走したき列の蟻
わが影に入りて目高の影の消ゆ

二〇二二年度 後期新会員紹介

木村　隆夫
さいたま市大宮区高鼻町一-十五-一-一〇三

吉川　拓真
さいたま市大宮区堀の内町一-六〇六 W-七二四

田中やすあき
さいたま市北区日進町二-一四〇六-二十

第二十回埼玉県現代俳句大賞作品募集

◆作品　未発表作品(厳守)
十五句（一人一編に限ります）
原稿は楷書で題名を付すこと。
前書き不可。所定の応募用紙の他、電子メールでの応募も受付けます。極端な類想があった場合は入賞を取り消します。

◆応募資格　埼玉県現代俳句協会員（年会費既納者）
※選者・正賞既受賞者は応募不可

◆応募費用　一、〇〇〇円（郵便小為替を作品と同封のこと。電子メールの応募も同様）

◆応募締切　令和四年十月十七日(月)　厳守

◆選考委員　桑原三郎　島田妙子　石寒太　岩淵喜代子　山崎十生　加藤いさむ　関田誓炎　山本鬼之介　網野月を　後藤章　田中朋子　原雅子　堀之内長一

◆顕彰
①大賞　一名賞状・賞金(三万円)
②準賞　若干名　賞状・賞金（一万円）
③佳作　若干名（記念品）

◆発表　令和五年三月　埼玉県現代俳句協会定期総会席上

◆応募受付　令和四年八月一日（月）～令和四年十月十七日(月)（厳守）

◆応募宛先　〒343-0806 越谷市宮本町二-一八五-一九
村本なずな方　埼玉県現代俳句協会俳句大賞係
（☎〇四八-九六六-六〇一二）
メールアドレス hananazuna394@gmail.com

◆主催　埼玉県現代俳句協会
（会長　山崎十生）

創刊百周年への足掛り

水明俳句会
山本　鬼之介

水明俳句会は、令和二年九月一日を以て創刊九〇周年を迎え、東京オリンピックの興奮醒めやらぬ同年秋に、記念全国大会と祝賀会を開催すべく、着々と準備を進めていたが、その年の早春に突如襲来した新型コロナウイルス災禍によって、会員一同が鶴首していた祝賀会が、その後二年に亘り延期せざるを得ぬ状態となった。

今年もまた駄目かと諦めかけていたが、コロナ禍の小康状態を縫って七月六日、ロイヤルパインズホテル浦和に於いて通巻一一〇〇号記念全国大会と創刊九〇周年と通巻一一〇〇号を併せた記念祝賀会を開催することが出来た。

祝賀会には、中村和弘現代俳句協会会長・山崎十生埼玉県現代俳句協会会長を主賓に十名ほどの来賓にご臨席いただき、和やかなムードの中で待望の宴を催すことが出来た。当日九分九厘予想されていた台風が物の見事に外れた穏やかな日和を、天帝からの贈り物であると会員一同で感謝した。

遥かなものと思っていた創刊百周年が、手の届きそうな八年後に迫ってきた。

◆句集の紹介◆

久下　晴美

★『単眼鏡』
◎出版年月日　令和四年五月六日
◎出版社　現代俳句協会

句歴二十年の節目として編んだ。句集名『単眼鏡』は〈秋風をまるく切り取る単眼鏡による。拙い句集だが是非お読み頂きたい。

○自選三句
こすもすや思ひの丈つてこのくらい
素つぴんが一番きれい冬の滝
意識してよりの心音雁の空

五明　昇

★『旅　信』
◎出版年月日　令和四年五月十四日
◎出版社　㈱文學の森

『花林檎』、『道草』に続く第三句集『旅　信』を上梓した。生来旅が好きで、旅こそ他人から奪うことなしに己が富む唯一の方法だと信じて内外に足を延ばしてきた。思えば人生そのものが大きな旅路、その意味では折々の俳句は旅先から郷里へ出す「旅信」とも言えるのでは・・・。これからも仮初の旅を仮初としない努力を生涯続けていきたい。

○自選三句
白魚の軍艦巻にある平和
気張らぬと決めたる余生草の花
飛石は着物の歩幅初しぐれ

「埼玉風土記」シリーズ（7）

金子兜太　熊谷の句碑

神田　一美

金子兜太は、一九六七年熊谷市に転居し、二〇一八年まで五十年余り熊谷市で生活している。少年時代、皆野町から片道一時間余り秩父鉄道を利用し、降りてから早足で二十分ほど歩き、旧制熊谷中学（現在の熊谷高校）に通った。文化功労者として、現代俳句協会会長として、日本を代表する俳人であるが、二〇〇九年、熊谷市名誉市民に推挙されたのは、しごく自然なことである。兜太自身は、都内のマンションが面倒がなくてよいぐらいに思っていたが、妻（皆子氏）の「土の上にいないと、あなたは駄目になります」という助言に添い、熊谷への転居となったと聞く。

熊谷駅から十分ほど歩いた、市役所隣りの中央公園に兜太の句碑がある。

利根川と荒川の間雷遊ぶ

さらに、「八木橋」デパートを経て、二十分ほど歩いた熊谷高校にも句碑がある。

質実の窓若き日の夏木立

市内には、他に五つも兜太の句碑があるが、車での移動となろう。

白梅に風雨の日日の澄みにけり
（熊谷市三ヶ尻龍泉寺）

たっぷりと鳴くやつもいる夕ひぐらし
（熊谷市上中条常光院）

草莽の臣友山に春筑波嶺
（熊谷市胄山根岸家長屋門前）

荻野吟子の生命とありぬ冬の利根
（熊谷市俵瀬荻野吟子生誕の地史跡公園）

行雲流水蛍訪なう文殊の地
（熊谷市野原文殊寺）

参考

俳句大会等順番表（令和３年～１２年）

ブロック名	俳句大会	吟行会	定期総会・一句会
県南Aブロック	令和 9年（2027年）	令和10年（2028年）	令和11年（2029年）
県南Bブロック	令和 8年（2026年）	令和 9年（2027年）	令和12年（2030年）
県南Cブロック	令和 6年（2024年）	令和 8年（2026年）	令和 9年（2027年）
入間・比企ブロック	令和 3年（2021年）	令和 5年（2023年）	令和10年（2028年）
熊谷ブロック	令和 4年（2022年）	令和 6年（2024年）	令和 7年（2025年）
秩父ブロック	令和10年（2028年）	令和 7年（2025年）	令和 6年（2024年）
埼葛ブロック	令和 5年（2023年）	令和 3年（2021年）	令和 4年（2022年）
北埼ブロック	令和 7年（2025年）	令和 4年（2022年）	令和 5年（2023年）

会報編集委員会

委員長　加藤いさむ（副会長）
委　員　髙橋比呂子（県南Bブロック）
委　員　北上　正枝（入間・比企ブロック）
委　員　小川　紫翠（北埼ブロック）
委　員　越川ミトミ（埼葛ブロック）

二〇二二年度 会費納入のお願い

年会費　一、〇〇〇円
会計担当　渡邉　樹音
住　所　〒340-0031 草加市新里町一一〇-一〇
電　話　〇四八-九二九-一五六一

◆編集後記◆

一ヶ月ほど前から百日紅の花が満開です。連日の記録的猛暑の日々、東北、北陸地方では二日で半年分の雨が降っている。地球温暖化猛暑の年ほど増えるという「線状降水帯」が多発している。コロナ、コロナ、ウイルス蔓延の言葉にも慣れっこになりがちな危機感が生まれつつあるわれわれに次はどんな恐怖が襲ってくるのか？　知りたいニュースの一つではある。次から次へ何が起こるかわからない昨今、俳句愛好家の皆様には個々にご自愛戴いて又いつの日か俳句大会で握手をしてハグ出来る日が参りますようにこの異常事態を乗り越えて頑張りましょう！

（北上正枝　記）

【事務局　住所】
〒三四七-〇一〇二　加須市日出安九六八-三
電話　〇四八〇-七三-〇五一二（加藤いさむ）

第八十三号　令和四年九月十五日　発行
発行人　山崎十生
発行所　埼玉県現代俳句協会
〒三三一-〇〇一五
川口市川口五-一一-三三
電話　〇四八-二五一-七九二三
編集責任者　加藤いさむ
印刷所　有限会社 千葉印刷